
モンハンの世界？

まいあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンハンの世界？

【NZコード】

N4199V

【作者名】

まいあ

【あらすじ】

ある日目が覚めるとハンターだった…

MHFの世界に突如来てしまった主人公の運命は…?

異世界・チートで性別も変わっちゃって悩む主人公に道は開かれるのか…?

別ブログ「マイアの日記」も更新中です♪良かつたら見に来てください

プロローグ（前書き）

初めての作品になりますので、宜しくお願いします。

プロローグ

目が覚めると大きな広場の入り口に立っていた。広場のは中央がくぼんでいるらしく、全容は見えないが路店が広がっているのか大勢の人の話し声や自分の店に客を呼ぶ声が聞こえる。

たしか昨日は仕事を終え帰宅したあと書類整理の疲れもあり早々に寝てしまつたような気が…？寝ぼけて変なところに来てしまったのだろうか？いやつそれはそれで問題があるが、まずはここはどこだろうと悩みながら、人のいるらしい所へとゆっくりと歩き始める。と体から『ガシャ』っと音が出た。何の音だろうと手を見ると…肘まで伸びた白い手袋？白い西洋風な甲冑？甲冑からのぞく白い肌に細い腕、肩まで伸びているらししい金色の髪……へつ？『なにこれ？』

思わず声にだすと、聞いたことがない高い声！？

え～っと、夢ですね？はい、わかります。と自己完結し周りを改めて見て、よく考えると広場の入り口にカウンターがあり紫色の服をきた綺麗なお姉さんがいる。

「あの、ここどこでしうつか？」

と聞くと、お姉さんは不思議そうに顔を傾げて

「ここはメゼポタル広場ですよ。ハンターさん」

と陽気に答えたくれた。メゼポルタ広場！？ここモンスターハンターフロンティアだ…そう言えば仕事が終わつた後の楽しみと言えば、最近始めたこのゲームで、やつと欲しい防具が揃つたばかりだつた。自分の格好をもう一度見直すとメインで使用しているリアル装備と背中に感じる重量はおそらくメイン武器である対竜武器の大剣エンドブレーカーだろ？自分の装備の重量がわかるなんてリアルな夢だな～と考えていると、

「もしかして新人ハンターさんですか？もしそうならギルドに加盟して新人研修する施設がありますよ。そちらにいるアイルーさんが案内人ですので話をしてみてはどうですか？」

と笑顔で教えてくれたので、お礼をいって教えられたところへ視線を移すと、いたよ・・・アイルーが。

アイルーとはハンターに飼われている一足歩行するネコであり、数多くの愛好家がいるマスコットキャラクターで言葉の後に『にゃ』をつける憎めないヤツもある。このネコはときにハンターの食事を作ったり、狩りに必要な情報を教えてくれたりもする万能なネコである。

近くによるところに気づいたらしくアイルーが振り返った。

「初めまして可愛いハンターさん。メゾポルタ広場は初めてかにや？」

と尋ねてきた・・・なにこの可愛い生き物！思わず頭を撫でたくなつた気持ちをからうじて抑えつつリアルな夢だなあと考えながら、この可愛い生き物の言葉をよく考えてみると30を過ぎた『お兄さん！』に向かつて『可愛い』は無いだろうと心の中でツッコミを入れながら夢だしなあと思い直した。それでも表情には出でいたらしくアイルーは申し訳なさそうにし、

「もしかして初めてじゃないかにや？僕は一度あつたハンターさんのことは忘れないつもりでいたけど、もしあつていたら『ゴメンにや』と俯いてしまったので、慌てて初めましてと伝えると嬉しそうに顔をあげながら

「よかつたにや！もしかして失礼なことを行ったかと思つたにや」と喜んでいた。来たのは初めてだし嘘ではないよなと自分に言い聞かしながらどうしていいか分からないと相談するとアイルーは胸を張り嬉しそうに新人ハンターが集まるギルドとかが経営している獵

団へ連れて行つてくれると言い歩き始めた。

随分と長い夢だが、楽しそうだったためもう少しダメ内でいて欲しいと考えながらアイルーの後ろについていくことにした。

プロローグ（後書き）

まだ投稿の仕方も分かってませんf^__^;
気長に見て下さい

新人獣団（前書き）

仕事が忙しく執筆が遅いですが、頑張ります。

とっても可愛らしい（強調！）アイルーについていくと街の外れにある集落へとついた。集落の中央には焚き火の跡があり、その周囲には雑貨を扱っている店や食堂らしい所があり人も様々活気づいている。ふと気づくと自分のような装備は見あたらずイヤクック素材の防具や粗末なチェインアーマーを着ている人が多いのに気づいた。

周りを見ながらほうけていると数歩前のアイルーが振り返り「あとは頑張るにゃ」といい元来た道へと戻つていった。アイルーにお礼を言つと嬉しそうに笑顔で応えてくれた。マジで抱きついてスリスリしたい衝動を抑え

振り返り、入り口にある受付らしいお姉さんに声をかけた。「かわいいアイルーさん連れてきてもらいました。初めてで何も分かりませんが、宜しくお願ひします。」とお辞儀をすると「ようこそ！歓迎しますよ。ところでお名前は？」と聞かれたので、ゲームで名付けている『マイア』と名乗ると

「改めましてはマイアさん。只今ハンター登録を完了しました。ハンター許可証を発行するには、この新人獵団で狩猟、採取などを覚えていただいて最後の試験を完了してからお渡しします。それまではここでしかクエストを受けられませんので注意をしてください。あとクエストに行くときは教官も同行しますけど、ここにいる他のハンターさんに行つても構いません。頑張つて下さいね」

と笑顔で説明をしてくれた。確かに周りを見ると粗末な鎧帷子やイヤンクックらしい装備を纏つたハンターが大勢いた。

入り口にいてもしょうがないと思い露天を見歩いていくと、様々な視線を感じたが気のせいだろうと露天のおばちゃんに「オススメちょうだい」というと、好きな食材から選んで良いよ！って言われ

たけど…見たことない食材ばかりだったので、奥のテーブルで食事をしている人と同じものを頼み空いているテーブルへ移動した。おばちゃんが作っている所をみると、変な虫とジャムを出して鼻歌混じりに料理をしている。…きっと大丈夫だよね…

しばらく待つとホットケーキに似た物が出てきた。さつきの食材から、どうしてこんなのが出来るのだろうと恐る恐る食べてみると、凄く美味しい！さつきの食材のことなんて忘れて一気に食べてしまった。

さてお勘定をつて考えたら、お金ドコ…慌てて財布を探すと腰の裏にある袋に入っていた（かなり安堵）。通貨の単位が分からなかっためおばちゃんに袋を広げ「お金ここから取つて」と言つと「お金もちなんだね～。」と言いながら硬貨を数枚抜いた。

本格的に何をして良いか分からず広場の中央にいくと3人のハンターがいた。片手剣、ハンマー、大剣を装備しておりいずれも金属と言つより「骨」の装備のようだった。防具は全員粗末な鎖帷子をつけているが、どこか楽しそうにモンスターとの武勇伝を語り合っている。その話を見つめていると大剣を背負つた背の大きいハンターが近づいてきた。

「よう！あんた見たことない装備してるな…ここにいるってことは新人ハンターなんだろ？」

と聞かれたので、

「さつきギルド登録したばかりです。装備は…親の形見なんです」と嘘をついてしまつたが、夢とかゲームとか言つよりマシかなつと思つた。

すると大剣のハンターは頷き

「あんたも大変だな。もしよかつたらこれからイヤンクック討伐に行くんだが、一緒にいかないか？その…無理はしなくてもいいんだが…」

と親を亡くしたばかりの傷心の少女に語るように話して来たため、

つい騙しているよつた気がして行きます。と答えると大剣ハンターは嬉しそうに

「そりゃ！俺の名前はマーティーだ。同じ大剣使いだな。宜しく！さあ仲間を紹介するよ！」

と広場の中央へ手を引かれていった。

田舎ご（農耕地）

小出しであります（――）
m

出会い

大剣ハンターのマーティーに連れられ広場の中央にいくとマーティーは改めて自己紹介をしてくれた。「俺の名前はマーティー。見ての通り大剣使いだ。こつちは片手剣のヒューアイ。そつちで座つてるのがハンマーのギルスだ。」

と言ふと、片手剣使いが会釈をした

「僕はヒューアイ。いまマーティーからあつたように片手剣を使つているんだ。いつかレジェンドと呼ばれる英雄を目指している。これから宜しく！」

と握手を求めてきたため手を差し出した。座つているハンマー使いは目線だけこちらに向け

「ギルスだ。宜しく。」

と短い挨拶を送ってきた。嫌われたかなと思っているとマーティーがあいつは人付き合いが苦手なだけで良い奴だとフォローしてくれた。

4人のフルパーティーは久しぶりだなつとマーティーはいい、準備が出来次第出発すると言つた。準備をどうしようかと悩んでいると片手剣のヒューアイが道具屋に案内してくれると言つてくれたので大人しく従つた。

道具屋は広場の中央から川側に近いところにあり、見たことがない薬品のようなものから食材らしき乾燥物、銃に使う弾まであつた。ヒューアイが言つには、これから狩猟に行くイヤンクックは攻撃力が高く敏捷性もあり初級のハンターでは難しいモンスターのため回復薬を買うことを勧められたため腰のポーチに入るだけ買うことにした。ヒューアイが言つには今まで3人のパーティーでイヤンクックを3回狩猟したことがあるらしく、今回も大丈夫だよと優しく話してくれた。

道具屋のおじさんから買ったものを受け取りふと川を見るとあまり

に澄んだ水が流れているため近づいてみると、かなり水が綺麗らしく川底まで見えた。その様子をみたヒューアイが釣りの話をしてくれていたが、私の耳には届かなかった。川に映っている自分の姿を見て…。

そう。まさしく美少女と言える細身の女性がいた。髪は肩まで伸びており、長い髪が田に入らないように赤い髪留めを付けている。身にまとう鎧は白銀であり、背に黄金色を纏つた大剣を背負い自分を見ている。

白い肌の顔立ちは綺麗に整つており、何故かその姿は戦乙女を思わせた。

ついこの川面に人がいるのではないかと恐る恐る水に手を入れると澄んだ冷たさが伝わってきた。

「…冷たい」

つぶやく私に「もうそろそろ寒冷期にはいるからね」とヒューアイが答えていた。

…もしかして、現実?と不安と期待が脳裏を横切つたが、ヒューアイと私を呼ぶ仲間の声に広場へ戻ることにした。

怪鳥遭遇（前書き）

PCから投稿してみました

怪鳥遭遇

マーティーの話によると田指すイアンクックは密林にいるらしく、そこまではギルドが用意する竜車に乗つて移動するらしかった。準備を終えクエスト発注所についていくと草食恐竜の馬車が用意してあつた。初めてみた竜は高さ2mほどあり、爬虫類のような肌をしているが目は優しかつた。この子なら乗れそうかなと「たのもよ」と恐る恐る頭を撫でると嬉しそうに竜がない。竜車は幌つきで、中の広さは6畳程度だが4人と装備を載せると少し手狭に感じた。ヒューアイが言つにはハンターのランクによつて竜車の大きさも変わるこというから、彼が言つレジェンドとなると金襴豪華な物かもしれないと想像した。

全員が乗り込むと竜車がゆっくりと歩き始めた。「ムのタイヤのないこの世界では木の車輪の周りに粗末な鉄を巻いているらしく、乗り心地は決して良いとはいえないがこれから狩りに行くという高揚感で気にもならなかつた。さつきまでは夢でないとしたら……と考えていたが、「目の前のことを精一杯」を心情としていた私はとにかく現状を見つめ、精一杯楽しもうと決意をした。

竜車に揺られながらこれから行くであろう密林がはたしてゲームと同じMAPなのだろうかとか、自分のステータスはどうなのだろうとか考えながらマーティー、ヒューアイ、ギルスの3人をぼつと見ていると不意にギルスが話しかけてきた。

「初めて行くクエストで浮かれているようだが、着くまでに武器の手入れはしつかりしたほうがいい。敵対して切れないでは周りに迷惑がかかるからな」

と目線も合わせず言つてきたので、慌ててポーチから携帯砥石を取り出しだが、ゝゝ、剣なんて研いだことないです・・・ハイ。ややしばらく大剣、砥石とにらめっこをしていると、マーティーが砥石を

持つて

「俺のは終わつたからやり方を教えてやるよ」
と言つと立ち上がり始めたヒューイーがチョッと口を鳴らし、また同じ場所へと腰を下ろした。

もしここにいる事になるなら必須のことなんだつと聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥との会社の先輩の言葉を思い出し目的地に着くまで3人の仲間に武器の研ぎ方、アイテムの使い方、モンスターの種類などを教えてもらつて行つた。

竜車に揺れること2日が過ぎた朝に目的地である密林のベースキャンプへと到着した。ベースキャンプはギルドが用意してくれているハンター用のキャンプ施設であり、薪火をする場所や簡易のテント・ベットが備え付けられていた。マーティーの話によると初心者獵団で来る密林は比較的近いため、熟練のハンターになると狩場までの距離が長くなるとも教えてくれ、ベースキャンプに余分な食料や調理器具を置き密林へと入つていった。

密林はテレビでしか見た事がない亜熱帯のジャングルを思わせる木々と葉に覆われており、ハンターや彼らが言つモンスターが歩く程度の獸道しかなかつた。ここに来るまでの会話で私が本当に初心者であり、これが初のクエストと知りギルスが不機嫌になり、マーティーは先生みたいになつてていたため密林での隊列はマーティー、ギルスを先頭にし私とヒューイーはその後ろを歩いている形になつた。それまでお喋りしていたマーティーとヒューイーもさすがに密林の緊張感からか、寡黙になつてゐる。気温はおそらく30℃以上で湿度は80～90%かなと思いながら歩いていたときに木々の向こうに動く影が見えた。良くみてみると青い鱗を持つた一足歩行の爬虫類・・・ランポスだ・・・。ランポスは1頭のようで遠くからこちらを見ているだけのように見える。

隣を歩いているヒューイーにランポスがいることを告げると慌びついて

いなかつたようで慌てて腰の剣に手を伸ばしたが、かなり遠くにいることを確認すると、息を吐き「あれだけ離れていてこっちにこないところを見ると、まだ警戒しているみたいだから大丈夫だな」といいマーティーもギルスもそれに同意した。これから始まる怪鳥イヤンクックとの戦闘を前に極力体力を消耗したくないと答えたし、その場を離れた。

1時間ほど山らしき斜面を上がっていくと丘に出た。丘からは眼下に先ほどのベースキャンプと澄み渡った海が見えるが、高さとするところ30mほどあつたためあまりがけに近づかないよう景色を楽しんでいると

「いつもこいらへんにイヤンクックが現れるんだ。武器を抜けるようにして置けよ…」

と怒ったような口調で言つてきたため少し気を抜きすぎたと反省し、素直に肩に担いでいる大剣を確かめた。

その時だった。羽ばたく轟音と共にいまた崖下からの通路の上から赤い羽根をもち、大きく鋭い嘴クチバシをもつた怪鳥が目の前にその羽かが織り出す風と共に降り立つたのだ！

『ギャウウウウウ……』

赤い怪鳥は今まで聞いたことがない奇声を上げて威嚇してきた！

怪鳥遭遇（後書き）

默文でございません ()
m

初戦闘（前書き）

初の戦闘シーンを描きました。かなり分かりづらいと思いますが、生暖かい田で見守つて下さい。

甲殻類的な赤い鱗、その巨体を浮かせる事の出来る翼、爬虫類の様な巨大な尻尾、大きいと言うには大きすぎるクチバシ、エリマキトカゲのようなトサカ、そして生きていることを強調する猛禽類のような目…そこにいることが当たり前のような堂々とした佇まいについのまた。正直、高々夢だろう。所詮はゲームと思っていたが、全てを否定された気がした。怪鳥と呼ばれるイヤンクックを甘く見ていたのあつたと思う。それがただイヤンクックに『会つた』ただそれだけで全てこれが真実なのだと知らされた感じだった。ゲームではわからない怪鳥の皮膚の動き、呼吸。見とれているとハントーである仲間たちが散会しイヤンクックに向かつていった。左から片手剣のヒューアイが、右側の死角のはずの場所にハンマー使いのギルス、そして私とイヤンクックとの視線を遮るように大剣使いのマーティーがそれぞれが襲いかかつた。

「なにをボケッとしてやがる！早く動け！」

とマーティーの声が聞こえたが、

「当てにするな！呑まれてるつ！」

と誰かの声が聞こえた。

イヤンクックは元々好戦的なモンスターなため、自分に向かつてくるハンター3人を敵として認識したらしく。素早い動きでチョロチヨロとするものに尻尾を回し当てていた。右から向かつたヒューアイはあくまで牽制のつもりで向かつていつたため、イヤンクックの尻尾の動きを読み盾でガードしていたが、正面から大剣を振り下ろそうとしたマーティーには直撃をした。マーティーはクチバシに狙いを定め大剣を上段より振り下ろしていくが、不意に右からの衝撃で体を宙に浮かせた。その間にギルスは彼の武器、骨で出来たハンマーで怪鳥を攻撃するが、翼に弾かれ後ろへ下がつていた。イニシア

ティブはイヤンクックが取つたかに見えた。まるで高画質、高性能な映画を見ているように私はそこから動けないでいた。現実と解つてもハンターと怪鳥が織りなす命のぶつかり合いに見惚れていった。

片手剣のヒューイが飛びながらの斬撃を与えようと地面を蹴り、マーイーは大剣で足をなぎ払おうと、ギルスは力を溜め強力な一撃を与えると。怪鳥はその何撃かを身に受けながらクチバシで、尻尾を回して反撃をしている。イニシアティブは取られたものの、その後の建て直しをし連携しながらの攻撃に怪鳥は徐々にその命を削りとられていた。その時だつた。傷ついた怪鳥は口から火球を正面から切りつけてくるマーイーに向かつて吐き出した。死の予感がした。マーイーが着ているのは作りが雑ともいえるただの鎖帷子であり、今までの戦闘で正面から向かつていつているマーイーも無傷では無かつた。剣を振り上げ怪鳥を攻撃しようとしていた戦士はかるうじて己の武器である大剣を自分の前に横に出すことでガードを出来たが、火球の勢いを押さえきれずに後方へと吹き飛ばされ体制を崩された。

そこに、もう一度怪鳥は今まで最大級の火球をマーイーに向かって吐き出した。きっと怪鳥は勝利を確信したのだろう。実質ヒュイー、ギルスも今までのように援護攻撃もせず顔に驚愕の表情を浮かべマーイーの方へ駆け出して来ていた。そのマーイーは後ろにいた私を巻き込まないよう『逃げろ！』と叫んでいた。私は今まで剣は使つたことは無かつた。現代社会において剣を使う、または剣を振るう人間などそれを趣味や仕事とするもの以外は殆どいないだろう。しかし、私は学生時代に無手の護身術をしていたため、体が勝手に動いた。反射的に動いた自分を『素手じや止めれないでしょ』と突つ込みを入れたくなつっていた。

しかし、私は自分の期待を裏切り背に背負つた大剣で迫つてきていた火球を受けていた。火球を受けた瞬間『飛ばされる？』と考えたが、そこまでの衝撃は来なかつた。今まで何もせずただ立ち尽くし

ていたはずの新たな敵に怪鳥は怒りを露わに突撃してきた。後ろにいるマー・ティー、こちらに駆けてくる一人の仲間もスローモーションに見えていた。私は大剣を振りかぶり力を溜めた一撃を、ちょうどの方へ向かつて走っていた怪物のクチバシへと狙いを定め振り下ろした。

パギャ

鈍い音と軽くなつた感触が手に伝わつてくる。そのまま地面に刺さった大剣を切り返し、今度は下から上へと切り上げた。狙いは違わず怪鳥の翼を切り裂き、どどめに頭に最速の振り下ろし切りを落とすと、存在感を発していた存在。ヤンクックはその場に音を立てて崩れ落ちた。

動かなくなつた怪鳥を見つめ、これはやはり現実なんだと自分に言い聞かせていると

「見えなかつた」

といつヒューアイの声が耳に入った。

初戦闘（後書き）

表現つて難しいですね…でも頑張ります！

高麗（高麗朝）

暫く待つことなつわうですか（泣）

今まで自分たちが一番強いと思つたことはなかつた。上には上がいる。たとえばレジエンドと呼ばれる生きながらにして、ギルドに認められているごく少數のハンター以外にももちろんいることは知つていた。たとえ新人獵団でイアンクック討伐をハンター登録後数週間で達成し、新人獵団記録を塗り替えている自分たちでもだ……。

ヒューアイがハンターになろうとしたきつかけは子供のころ親を喜ばせようと特産キノコを探りに行つた時にモンスターと遭遇し死を覚悟した時に一人の初老のハンターに助けられた時だつた。その時に見たハンターの戦いは今なお眼を閉じれば浮かんでくる。片手剣をもち雌火竜をたつた一人で討伐した雄姿が……。後にそのハンターが片手剣のレジェンドと呼ばれていることを知り、自分もいつか人を守れるハンターになろうと修行を初め16歳の時に村を出てこの新人獵団に来たのだつた。

獵団に入った当初周りは新人ハンターばかりだつたが教官をはじめこの獵団を出ていま1級の上位ハンターになつた先輩たちとも狩りをする機会があり、諸々と学ばせてもらつた。片手剣、双剣、ハンマー、槍、大剣、狩猟笛、ガンランス、ライトボウガンそれら全てを見て学んだつもりだつた。

しかし、いま目の前で起こつたことが理解できなかつた。もちろん大剣を見るのが今日初めてというわけではない。大剣というのはその重い重量で相手を粉碎するためスピードよりも威力を重視している武器であり、自分が持つてゐる片手剣に比べ鈍重なイメージすら持つてゐた。それだからこそ理解が出来なかつた。速度に慣れた自分が遠く離れているはずの大剣使いが振つた剣の軌道が見えなかつたのだ。大剣使いは最近腕を見込んで仲間に入つたマー・ティンでは

ない。つい先日仲間に入れた剣の研ぎ方も知らない素人だ。装備こそ充実しているが親の形見らしくその動きはハンターとは見えなかつた。あれがフェイクだとしたらすごい人間だとも思う。戦闘が始まつたときでさえ初めて見たであるうイヤンクックの威嚇で一步も動けずにいたのだ。それがなぜ？自分を否定されているかのような錯覚を覚えていた。これが夢であるならとも思うが、先ほどの戦闘で腹部に受けた傷がそれを否定する。

これが才能と言つなら神を恨もつと思つた・・・。

マイアは田の前で絶命している怪鳥を見た。翼は無残にも引き裂かれ腹部と頭部からはその臓物が出ていた。今まで虫くらいしか殺した事がない、食材はスーパーでパックに入つたものしか見たことがない現代人が初めて自分で息を止めた生き物を見て吐き気が止まらなかつた。ゲームの中ではどんなに乱撃を加えても体の一部のディテールが崩れるだけで、どこが残酷な描写なのだろうと思つていたが現実は違つていた。思わず手にしている大剣エンドブレーカーを落とし、その場にうずくまつて・・・なぜか泣いていた。

そんな新しい仲間を見ているマーティーは驚愕の表情から我に返り、わけもわからずマイアに話しかけた。「すげえなコレ！おまえ新人つて言つてたけど何かやつてたんだな！それならもつと早く動いてくれりやよかつたのに！・・・あれか？俺たちを見極めようつて魂胆か？」とふざけ半分で言つた時に少女の涙に気付き激しく狼狽しおろおろと慰め始めた。

そう、これは夢ではなく真実でありこれからがはじまりであることには気づき、この世界で自分がどうすればいいのかの答えを迫られたのだと気づいたから・・・。

モンスターを倒した時に嬉しいかなあ・・・て考えた時に、リアルで起こるところなるかなって考えながら描いてみましたが、描写がわかりづらくてスマセンm（――）mもっと頑張ります^ ^；

#キャンペーン（前書き）

こんな小説をお気に入り登録してくれたり、ポイントを入れて下さつて感謝します（ ）

キャンプにて

倒したヤンクックの素材を剥ぎ取っているときも白い鎧の大剣使いである少女はうずくまっていた。時折此方を見たりもするが、すぐさまを反らしてしまう。気を使つていてマーティーも素材が欲しかつたらしく今は隣で剥ぎ取りを行つていた。よく考えると不思議な少女だった。年の頃なら自分と同じ位だから15～17位だろう。装備を身に纏い佇む姿はハンターを思わせるが、狩りは初めてらしく採取すらしたことがないと言つていた。砥石の使い方も知らないが大剣の使い手としては恐らく上位ハンター並かそれ以上。そしてハンターなのに倒したモンスターの剥ぎ取りもせず俯いている。なりハンターとして、剣士としても華奢でありとても大剣を持てるであろう体つきをしていないのだ。通常女性ハンターは男よりも過酷だ。もとから無い筋力を鍛えモンスターが生息する地へ向かうのだから、当然体つきも変わつてくる。彼女が持つてている大剣を持たせて貰つたが、例え男であつてもあれを振り回すには相当の筋力が必要なはずなのに鎧の下までは分からぬが、鎧から見えている肌は透き通るように白く、細く、美しかつた。顔にも傷は無く凛と整つた顔つきはすれ違う男の大半を振り向かせるだろうとも思う。正直自分もハンターとしての腕前よりも無骨なパーティに華があればくらいで仲間に入ることを了承したのだ。さそつたマーティーはそんなことまで考へている様子はなかつたが……。

そこまで考へてヒューリイは思考を止めた。とにかく自分を努力をしなければ。今回狩つたヤンクックはビックサイズだったため、念願のクック装備をみんなと揃つてつくれそうなどを素直に喜ぶ様にして、横で剥ぎとつた素材を親切心で渡そうとしているマーティーを無言で諫めた。彼女の表情から生き物の素材に対する嫌悪感が見えたからだ。

この不思議な少女がどうなるのか、またハンターとして育てるための方法を考えながらベースキャンプへと戻ることにした。ベースキャンプから獵団のキャンプへ戻る竜車に揺られながらマイアはこれからのことについて悩んでいた。

選択肢は数通りあった。一つ目はキャンプに戻り次第パーティーを抜け街か村を探しそこに住むこと。これは自分が比較的お金に余裕があるらしい今なら可能であるし、一番危険が少ない。二つ目は違う強いパーティーを探し守つてもらうこと。ただし強いパーティーに入れば相当のモンスターとも戦うはずなので危険も伴う。三つ目はこのパーティーでハンターとしての生き方を学ぶことだった。

考えがまとまらないまま竜車はキャンプへと到着した。マーティーたちはクック装備が造れると喜びながら足早に工房へ行こうとして荷物である素材をまとめた。私はそんな様子を見つめながらキャンプ内を探索してみることにした。ゲームの中では篝火を中心にして小さなキャンプというイメージであつたが、実際の場所は様々な店や食堂が並び如何に自分の店に客を呼び込もうかと賑わっていた。ハンターも大勢いてまるでお祭りだなあと喧騒の中に行つて見ることにした。

喧騒の中に入つてみると、レウス装備をしているハンターやクシャルダオラ装備をしているハンターも極少数だが発見し、HR1-1以上は入れないとゲームの中だけなんだな」と考えながら歩いていると、つい向かってきている人にぶつかってしまった。余所見をしてしまつたと慌てて誤ろうとしたが、クックメイルを着た巨漢の戦士が突然「いえええええ」!と言つて地面に倒れこんでしまつた。

確かに鎧の肩から相手の腕に当たつてしまつたが(私のほうが背が

低いため腕に当たった)、私が着ているリアル装備の肩当は別段角や棘があるわけではなく、なにより相手の腕を破壊した感触はなかつたため、どうしたんだろうとぶつかってしまった戦士の腕を看ようとした時、戦士の仲間らしい茶色のゲネポス装備をしたハンターがこちらに向かってきた。

「おーい！おまえ！何てことをしてくれるんだ！これから初めて雌火龍を狩りに行こうってしてただぞ！」

と顔を赤らめて怒鳴ってきた。

「やつ・・・あの・・・なんともないと思うんですけど、私にぶつかったことより自分で転んだときに打った膝のほうが痛そうですよ？」

そう、私は彼が自分から倒れたのは分かつていた。

だが証拠がない。

「てめえフザケンナヨ！俺の相棒にぶつかって怪我までさせた挙句わざとぶつかつたっていいてえのかよ！？」

「ちょっとコツチこいやつ！」

と突然手を引つ張つてきたが・・・ホンキデスカ？つて位ヨワヨワしい・・・？黙つて手を引かれるのもヤダなあとその場で我慢？していると

「てめえ！抵抗する気かよ！」

と手をつかんでいた逆の手で殴りかかってきた。厄介！とつて勝手にくるんだよねと思いながら、拳を払いのけようとしたときゲネボス男の手が突然掴まれた。

「女の子相手になに粹がってるのさー！」

と掴んだ主はその腕を間接の逆側にひねり上げそのまま男を投げ飛ばし、クック装備の男に

「そこ》でさつきから倒れてるアンタ！本当に使えない腕に破壊してあげようか？」

と優しく声をかけた。その騒ぎを聞きつけたのか男の仲間らしい男

共が集まってきた。あたりのハンターは私たちを中心にわざわざ道を空けステージを作つたようで「やれやれ～」とか「姉ちゃん負けんなよ！」とか無責任なことを喚いている。野次馬の内側を囲んでいる奴等の仲間は武器に手を掛けながらこちらへジリジリと近づいてきていた。隣を見て助けてくれた人を見ると年のこなはそういう変わらない薄茶色のショートカットの女性がいた。

つて言うかさつきも今も近づいていることに気づかなかつた。足の運びや呼吸から見た目からは想像できない達人の香りがした。

「ねえアンタたち。ここで武器を抜こうって言うの？丸腰の女の子2人に大の男が大勢でね・・・。ここでの不文律を知らないってことはあんた達新人かただのチンピラだね？」

といい、丸腰にもかかわらず女性は周を囲んでいる男共に向かつていつた。戦いは一方的だつた。その女性は関節技を知つてゐるらしく、武器を持つてゐる相手の懷へ踏み込み腕の部分を掴み自分に向かつてきている男に投げつけるを繰り返していった。私のほうにも腕を碎かれたはずのクック装備男が元気良く腕を振り降ろしてきたので、その腕を掴み、勢いを殺さないよう引きながら懷へ背を向けながら入り腰を跳ね上げた。背負い投げである。優しい私は彼が嘘つきにならないようにチャンと引き手を離してあげた。

・・・2mは飛んで肩から落ちた彼を確認すると、女性のほうも終わつたらしくこちらへ向かつてきた。

「災難だつたね～。いつの頃もあんなのいるんだね～。あんな腕で雌火竜のところに行つたら瞬殺されちゃうよ」

と、どこから持つてきたか分からぬ布で自分の拳を拭つていた。「助かりました。ありがとうございます」と頭を下げる。「もしかして必要なかつたかもだけどね。」と舌をペロッと出して笑つた。

「新人さんの動きに見えないけど、見たことないってことは新人さんだよね？私はここ卒業生なんだ。たまに遊びにくるんだけど、

か弱い女の子が襲われてたから余計なことじちやつた。よかつたら
お詫びに飲み物でも奢らせてよ。」

と笑顔で言つてきた為

「助けてもらつたんだから私が払います！」

と言つと

「じゃあ、宜しく。私の前はアヤノ。アヤノ＝ラシマだよ。よう
しくねっ」

と小悪魔っぽく笑いながら握手を求めてきた。

キャンパスにて（後書き）

会話の表現つて難しいですよね。
・・・でも、頑張る！

アヤノ（前書き）

お待たせしました m () m

アヤノ

アヤノ＝テンマと名乗った女性に手を差し出され、自分が自己紹介していなかつたことを思い出し慌てて手を握り返しながら「えっと・・・マイアです。助けてありがとうございます。見てのとおり新人のハンターです」

と自己紹介をすると

「ふーん。見ての通りね〜・・・そこいら辺の上位を名乗ってるハンターより出来そうだけど」

とつぶやき、立ち話をなんだからと近くの軽食屋のよつな所へ行くことにした。

軽食屋につくとアヤノは給仕のお姉さんに適当に冷えたもの持つてきてと言いつちりへ向き直った。

「マイアさんだっけ？まず私のことアヤノでいいよ。私はマイアやんつて呼ばせてもらひから」とウインクを飛ばし、照れた私に意地悪そうな笑顔を見せた。

「・・・じゃあ、アヤノはハンター生活は長いんですか？」と聞くとまだ一年くらいと教えてくれた。

「マイちゃんが着てる鎧って、どこからもらったの？もしかしてレアルキットじゃない？」と急に真剣な眼で聞いてきた。

リアルキット。それはオンラインゲームであるモンスターハンターフロンティアで課金装備といわれるものだった。私はそのリアルキットの白色の鎧を身に着けている。ただ、こここの世界についてからは一度も課金装備を見たことがなかった。

しかし、自分がまだ見たことがないだけで誰かが持っているかもしないと思い、その言葉を肯定するとアヤノは驚き、言葉を選びながら話しかけてきた。

「マイちゃん。今まで色々あったと思うけど、今はこれが現実。自

分がこれからどうして行くかをじっくり考えて行動したほうがいいよ。マイちゃんのスキルはきっと自分で思っている以上にあるからね。

でも、決して無理はしないで。」
と言い、何かあればとアヤノの所属している獵団への連絡先を教えてくれた。

頼んでいた軽食と飲み物が来た為しばらくアヤノと仲間のことなどを歎談し楽しんでいると、店の外が騒がしくなってきたのに気づいた。アヤノはまた喧嘩でしょうね。といつて丁度紅茶を飲み干している所だった。また巻き込まれるのではと不安に思つていると、見透かされたようで

「だいじょーぶだよ。いくら変なのが多いつていっても1日に2回も3回も巻き込まれることなんてないからさ」

と笑顔で言つてくれたため、額き表に出ると人だかりが出来ていた。どうやら中心部ではまた喧嘩が起きそつだと野次馬のハンターが教えてくれた。君子危きに近よらづとは先人が残した重要な言葉ではあるが、何があつたんだろうと覗き込んでいる

「そんなところじゃ見えないよ。もつと前に行つてみよう…」
とアヤノに手を引かれながら中央のほうへ人ごみをかき分けて行つた。

見やすい位置へ来るとアヤノはそこに座り込み、長期戦の構えをとり私にも座るように薦めてきたので従うこととした。見やすい位置といつても集団対数人のように私たちが座つた所は集団の後ろ側だつたため数名のほうは見えなかつたが、戦闘が始まれば一番前の特等席であるここからはすべてが見えるようになるだろうと思つた。

周りの野次馬たちは私たちのときと同様に「やれ！」とか「なかせちまえ！」等と無責任な野次を飛ばしている。中央では一瞬即発のようだがまだ戦いにはなつていない。最初は周りの声で聞こえなかつた声もだんだん怒声となつてきており、内容も聞き取れるようにな

なってきた。

どうやら数名のパーティーの仲間が手前の集団の仲間に手を出したらしく「早くつれて来い」とか「どこにいるか分からないし、分かつてもそれはない!」とかのやり取りをしているようだった。手前の集団を見ていると横にいる野次馬ハンターが集団のことを『獵團・赤い怪鳥』と呼んでいた。最近出来たばかりの獵團で新人の最初に当たる難敵であるヤンクックから名前を取つたらしいが、獵團員が人数の多さを影にあちこちで悪さをしていること、その獵團長が上位のハンターであり団員の揉め事には必ず出てきて新人ハンターであろうが肅清という名の暴力を振ることで有名らしかった。

そんな理不尽な話を聞きながら、いま絡まれているのも善人のハンターなら助けないと想いかなと見えながらアヤノのほうを見ると、座つたまま両手を頬に当てて子供のような期待をした目で中央を見ていた。

すると中央の方で野卑な笑い声が聞こえた。どうやら数名が探しているのは女性のようで、その情勢を赤い怪鳥で捕まえ陵辱をしたと言つ話になっていた。聞くに堪えないなと思つてみると突如集団の前で乱闘が始まつた。乱闘は数名のハンターに赤い怪鳥が押されているようで、後ろに下がつてきたレイアシリーズの鎧を身にまとつてゐる2人の男たちが部下たちに叱責を浴びせていた。数名のハンターは揃つて赤い怪鳥ヤンクック装備を身にまとい迫り来る暴漢たちを素手で殴り飛ばしていた。

その中に褐色の肌をした大剣使いがいるのを確認した。

なぜマーインがそこにいるんだろうと悩んでいると、

「良く頑張っているけど、そろそろ限界かな~」

とアヤノが言つた。中央での乱戦は序盤ヤンクック装備の3名が押していたが、赤い怪鳥の半分10名ほどを倒す頃に疲れが見え始めて劣勢になつてきていた。赤い怪鳥の方は上位ハンターと思われる団長と副団長の2人は無傷のであり、戦いは終わりを迎へそうにな

つていた。

「おい！お前らちょっとやめろ！」

レイア装備をした大柄の片手剣使いが叫ぶと、部下たちはイヤンクックのハンター達から距離をとり逃げられないよう円陣を組んだ。

「しかし、口ほどにもねえな。お前の仲間は俺たちが美味しいただかせてもらうぜ！」

と笑うと周りの部下たちも吊られて笑い出した。

「俺たちの仲間に手は出させねえ！マイアを返しやがれ！」

マーインだつた。遠くで見えづらかった事と赤い鎧を着てている事で今まで気づかなかつたのだ。ということは彼らが捕まえて陵辱をしたと言うのは私のことのようだつた。もちろんそんなことをされた記憶はない。マーインたちに因縁をつけるために彼らが言った嘘という事になる。しかし、マーインたちはそんな嘘は知らない。気づいたときには、一番後ろで笑つてゐるレイア装備の男を・・・蹴つていた。

男は綺麗に放物線を描き列の一一番前の男を通り過ぎマーインの前に顔から落下した。

中央の集団、いや周りをとり囲む野次馬までもが静かになつた。マーインが何があこつたか分からぬ顔でこちらを見ていのを確認した。マーインだけではなくヒューイ、ギルスまでもが頬を腫らせ安堵の表情を浮かばせたとき私の怒りが爆発した。

「私の仲間に何をする！」

咆哮し、そこにいる集団に襲い掛かつた。

赤い怪鳥の団員たちもこの新人獵団では名の知れた存在であり、中には上位クエストにも行つてゐる者もいたのだろうが、遅い。これが正直な感想だつた。迫り来る男たちの手を、足を払いのけ最初に蹴り飛ばした団長らしき人間が気づいた時に中央で立つてゐるのはマーイン、ヒューイ、ギルスと私だけだつた。

「てつ・・・てめえら！赤い怪鳥を敵に回そつてんだな！俺たちはまだまだ数がいるんだぜ！次に会うときが手前らの死ぬときだ！」

と逃げ出せたとする団長をむざむざする影が動いた。

「テ・・・テンマ」

影はアヤノだつた。

「赤い怪鳥・・・だつけ？私のことを知ってるんだ？たしか団長はファーガスだつけ？」

と腕を組み団長、ファーガスを睨み付ける

「あの子は私の連れなんだ。もつ手出ししないでくれたら嬉しいな。」

「テンマ・・・レジエンド・テンマの連れ合いかよ！」

とファーガスは地獄の鬼にでも合つたような表情を浮かべ腰碎けに逃げていった。

そこで野次馬たちもアヤノのほうを見つめた後、アヤノの視線から逃げるようにならなくて散つて行つた。

「あなたがマー・ティンね？マイちゃんから話は聞いてるよ。話どおりの熱血漢だね。

その腕前ならすぐにでも上位にこれそうだね。」
と微笑みながら手を出すとマー・ティンは自分の手を鎧にこすりつけ泥を落としてからアヤノの手を握り返した。アヤノはヒュード・ギルスとも握手を交わし、いい仲間を持ったねと話しかけてきた後、「強すぎる古龍は仲間から恐れられ、いつも一人。

マイちゃん？

貴女の力量は、その前のハンターランクである数字の分だから。

一人で悩まないで、何かあつたら訪ねてきてね。」

と言い残し、喧騒の中へと姿を消した。

アヤノ（後書き）

短文で申し訳ありません。
不定期ではありますが、頑張って更新します！

どうやらマーティー達に因縁をつけてきた猟団・赤い怪鳥は先に私とアヤノにやられた暴漢の仲間だつたようだつた。あれだけやられれば後の報復は無いと思つた。たとえ勘違いとはいえ私を守ろうとしてくれようとした仲間たちを見ると、皆顔を腫らしていた。正義感が強く仲間意識の強いマーティー。少しキザつたらしきけど片手剣の研鑽に対しても何時も真剣なヒューキー。寡黙なハンマー使いのギルス。最初この世界に疑惑と不安しか無い私にこの世界での生き方を教えてくれている仲間たち。足手まといになり、いつまで一緒にいるだろうと思つていた仲間たちが自分を友として受け入れてくれていた事実に気づき涙が出そうになつた。そんな私を見てヒューキーが駆け寄り

「もう大丈夫だからね」

と優しく声をかけてくれたとき熱いものが頬をつたり、仲間と初めて意識した自分に気づき、信じようと誓つた。

「無事でよかつた！」

腫らした顔でマーティーが喜び私の手を握り激しく上下させた。

「どうやら何もなかつたようだな。数日休んで次のクエストに行こう。休むところはいつも行つているマーティーのお気に入りの娘がいる宿屋でいいんじゃないかな？」

ギルスはマーティーを見てニヤリとし先頭を歩き始めた。

宿屋への道を歩きながらヒューキーがマーティーの慌てぶりや最初に手を出したときの相手の表情、どうやって相手を倒したなどを身振りを入れながら大げさに教えてくれるとマーティーとギルスから笑いが漏れた。

そろそろ宿屋に着くだらう道を歩いていると先ほどのアヤノの話になつた。

アヤノは一年ほど前に突然この新人キャンプに現れ、急成長しながら

らレジエンドと呼ばれる存在になつたらしい。この新人獵団でイランクック討伐の最短記録をもつのは自分達だが、それはアヤノがイヤンクックより先にリオレイアを狩猟していたことが原因らしい。そしてアヤノがレジエンドと呼ばれる理由として彼女が1人で古竜を數度撃退している事實をギルドが認めたことを教えてくれた。「マイアもアヤノと同じ感じがしたな?」と言つマー・ティーの言葉は全力で否定した。宿屋につく頃には日が傾きかけており近くの酒場からは人の笑い声が聞こえてくる。不意にギルスが宿屋の入り口を開けると中から強い酒の臭いと共に喧騒が聞こえてきた。1階が酒場兼食堂になつていて30坪ほどの広間いっぱいにハンター達が食事や早い晩酌をしていた。宿屋の奥に階段があることからこの上が宿になつているのだろうと想像した。

カウンターまで進むとマスターが3人の顔を見て笑いながら話しかけてきた。

「おいつマー・ティー。最近のモンスターはキャンプの中にでるのか?」

「ああ。マスターも気をつけた方がいいぜ?なんたつてイヤンクックが群れをなして襲いかかって来やがったからな?」

マー・ティーが笑いながら返すとカウンターに座つているハンターが

「キャンプに巣くつているモンスターに自分からかかつていつたらしいじゃねえか?しかも奪われたお姫様を助けにいったんだろう?やるなマー・ティー!」

と声をかけてくると、お姫様に反応した数名のハンターが近くに寄つてきた。

「おい!マー・ティー!お姫様つてなんの話だ!?詳しく話してくれんんだろうな?」

と巨漢のハンターがマー・ティーの首に手を回し、逆の手に持つていた酒瓶をマー・ティーの口につけあおらせた。

「マー・ティーはここの人氣者なのさ。さつ部屋はとつたから先に休んだ方がいい。そつしないとマイアまで酒の肴なされちゃうよ。」

とヒューイーが上に逃がしてくれた。

階段を上がる途中に酒場を見ると大勢のハンターの中で腫らした顔で笑いながら酒を煽るマーティーが見えた。あんなに腫らして酒なんて飲んだらと思ったが楽しそうにしている仲間たちを横目に2階へあがつた。宿屋の部屋は4畳くらいで小さな窓と粗末なベッドがありあつた。着ていた鎧、リアルシリーズをひとつづつ外し窓の下に置いた後、鎧の下に来ている綿当てを脱ぎアンダーウェアだけの姿になつた。

思つていたより疲れていたらしくベッドに横になると睡魔が襲つてきた。少し夢見心地のまま自分の体を見るとやはり、明らかにその姿が変わっていた。この世界に来て直ぐにクエストに向かつたこともありゆつくりと自分の体を見たことがなかつたが、改めて見ると軽い衝撃を受けた。

胸元には今まで在るはずもなかつた双丘があつた。大き過ぎず小さすぎず。さわつてみると手のひらから少しでる感じでC位かな?と思つると同時に今まで鎧の下にあつたため見ないようにしていった。下の方も見ないようにしていたが、スッキリしてしまつていてことを確認し本物なんだと痛感した。

とにかく今は休もう。みんなの腫れが引けてから次のクエストに行くことを自分から話そつと決め、睡魔に身を任せた。

変化（後書き）

引き続き頑張ります！

出発（前書き）

携帯投稿のため誤字脱字があると思いますが、ご了承下さい m(_ _)m

朝日が窓に差し込み目が覚めた。着替えをして下に降りると片づけは終わっているようだったが、まだ昨日の酒の臭い（もしかすると染み着いているかもしないが）が鼻をくすぐる。店の人は何時まで仕事をしていたのだろうと考えていた時にカウンター奥の厨房からマスターが出てきた。マスターと言つてもバーテンと言つよう山賊…は言い過ぎだとしても、卒業した冒険者で元剣士でした。と言つような感じであり一九〇〇mはあるう巨漢の隆々とした筋肉と髭をもつマスターである。昨日の荒くれ共の中で酒場を開くならこういう人じやないと無理なのかな?と思案していると

「おはようー」

と大声で挨拶されたため、おはよう!じゃいますと返事を返したが少し裏声になってしまった。

「昨日のお姫様だよな?」

「お姫様じゃなくてハンターです!」

マスターは強面の顔を崩して話をしてきたが、ついムキになつて反論してしまつっていた。

「へえ~。

俺あ女のハンターって言つとムキムキマッチョのイメージがあるけどな。大方憧れとかなんだろ?」

「ムキムキマッチョってのは笑えるけど、これからそうなるかもしれないけどその時は無視しないでね?」

最初はムキになつたが、そんな女性ハンターを想像して笑いそうになつたため諦めて冗談で返した。

「嫁には貰つてやれねえが無視はしないぜ? 気に入った! 試して悪かつたな。」

今までの意地の悪い笑いから晴れた笑顔になり、握手を求めてきた

ためその手を握り返すと不思議な表情で「おまえ…底が見えねえな

：いや、本当に悪かつた」

と剥げた頭を後ろ手にかきながら、ハンター辞めてこここの給仕にスカウトしようと思つたんだけどなと笑つた。

つられて笑いながら

「お払い箱にされたら泣きつきに来ますね？」

と言つと

「マッシュチョになつてなかつたら困つてやるよ？」

と言つマスターの頭にチリトリが飛んできて、

「馬鹿言つてんじやないよ！早く仕事しなつ！」

と言いながらマスターの奥さんらしい背の低く整つた顔立ちをしているが、どこか凜とした若い女性が出てきた。

気にしないでねと笑顔で朝食を出してくれた女性を見て、「女性って怖いです」と思つたが、いまだ床でうずくまつているマスターを見て声には出せなかつた。

かるい朝食を終えたとき一度マーティー、ヒューオイ、ギルスの3人が降りてきた。3人とも昨日より顔を腫らしており、マーティーに至つては右目が見えないのではないかと思うくらい瞼が腫れていた。

3人に「おはよう」と挨拶し、テーブルに移り食事をしながら話をしている仲間を微笑みながら見ていると、ギルスが強化に必要な鉱石を取りに行きたいと言い取りあえずランボスでも狩りながら集めようという話になつた。

食事が終わつてから準備をしてギルドへ出発するからと言われ部屋へ戻つたが、どうしても気になるのでマーティーの部屋へ行つた。マーティーの部屋も私の部屋と同じ位の広さであつたが、下着とかが散乱してゐるのを見てアパート契約てるのかな？と首を傾げると、マーティーが慌てて部屋を片づけ始めた。

「ノックくらいしてくれよ！？」

と悲鳴の様な抗議をして来たため、「ごめんねと誤った。

「でつ、何の用だよ？まだ準備は出来てないんだろ？」

まだ鎧も着ておらず部屋着で訪れた私にマーティーは田も合わせずに聞いてきた。私は無言でマーティーに近づき…

マーティーの顔を手で触れた…うん折れて無い。一番怖かったのは眼底骨折であったが、ただの内出血らしく血を抜けば田は見えるようになりそぐだと触診すると、なぜかマーティーの顔が真っ赤になつていた？

「マーティー風邪？」

「いきなり何すんだか…」

と怒っている？ので田を見えるよつと思つて触診したと告げるが、ホツとしたような苦虫を噛んだような不思議な表情をしたが、マスターから貰つた酒をかけて借りた応急セットから小さいナイフを取り出し瞼の上の患部を切り、血を抜いたあと塗り薬を塗つて置いた。たぶん3日もすれば塞がるからと伝えると驚きながら喜んでいた。

自分の部屋に戻り携帯食料やアイテムをリコックにつめ、準備が終わる頃にヒューリイに呼ばれ下に降りた。

「さつギルドに行こうぜ…」

先頭を立つリーダーの瞼の腫れが引いているのを見て安心しながら後ろを付いていった。

鉱石とランポス（一）（前書き）

大変遅くなりました（^_^;）

鉱石とランポス（1）

今回は採取もあるため道具屋に寄りピッケルを購入していく事になった。ピッケルは鉄製のようであつたが、その作りは荒く粗末でありツルハシの先端は何度か使うと刃先が曲がるか折れるかしそうと不安になる品物だった。ヒューアイの話によると、この上のピッケルグレーートと言う良品もあるが中々手に入らないと教えてくれた。道具屋を後にしクエスト発着場に行き、どの竜車かな?と見ていると偶々前にお世話になつた竜車が空いていたことから「この子がいい!」とついワガママを言つてしまつたが、ギルドの派遣員である木の良さそうなおじさんは笑顔で了承の旨を伝えてきた。優しい顔をしたアプローチスに「また頼むね」と言いながら頭をなでると嬉しそうに甘えてきた。

そして再度密林へ向かつことになつた。

前回来たときは不安や期待で一杯だつたため気づかなかつたが、落ち着いて密林を見てみると亜熱帯地域の様であり神秘的なものを感じた。しかも車の排気ガスが混ざつた空気が当たり前だつた私にとっては『空氣つてこんなに美味しかつたんだ』と感じさせられるものがあつた。

ベースキャンプに着いたときには太陽が沈みかけており、夜の密林は危険と判断し日が昇つてから探索を行うことにした。

夜の密林は元いた世界のように電灯等がないため満天の星空を眺めることができた。自分の知つてゐる星座はないか探してみたが、そんなに詳しくなかつた事と星が多くすぎて分からることから断念し諦めて純粹に星空を楽しんでいるとギルスがこちらに向かつてきているのが目に入った。

「星がそんなに珍しいのか?」

言いながらギルスは私の一步隣に腰を下ろし手に持つていた果実酒

を薦めてくれた。

「うん、とてもね。

空気が澄んでいるからとても綺麗だし、こんな綺麗な星空を見たのは初めてだから。」

と薦められた果実酒に口を付けた。果実酒はパイナップルの様な味をしたがギルスの地方で取れる果実を使っているらしく、形を聞いたがパイナップルではないと思った。

「自信を持つことだ。

そして俺たちを信じる。

お前は自分が思っているほど弱くはない。お前の動きだけを見ていれば、それは熟練のハンターの動きになつていて。足運び、呼吸、武器の扱い方。それは忘れたのか思い出したくないのかは分からないが、俺たちが保障する。

頑張れ。」

と短く語り手に持つていた果実酒を一気にあおると少し酔つているからなと言い、立ち上がり寝床へと向かつていった。そんなギルスの想いに

「ありがとう！」

と叫ぶとこちらに向かずに右手だけを上げて答えてくれた。

朝目覚めるところの世界に来ていて、気づいたら自分のキャラになつていて容姿も性別も変わっていた。知っている友人などはもちろんいなく、もといた世界に戻るための方法も思いつかず、どうしたら嫌われないか？自分は不自然じゃないか？自問自答していた私にギルスは「俺たちを信じろ」と言ってくれた。もう自分を偽らないで行こうと決めたときに口に運んだ甘い果実酒がなぜか塩辛かつた。

満点の星空も東から上る朝日に消され小鳥のさえずりの声で目が覚

めた。気づくと昨日星を見ていた場所で寝てしまっていたらしい。

体の上にかかっていた毛布は誰かが気を使ってくれた証拠だろうと思いつ、みんなが寝ているところへ行くと3人ともまだ寝ていた。

3人は各自好きなように寝ていたが、マーティーだけが毛布を掛けていなかつたためそつと貸してくれていた毛布をマーティーに掛け朝食の用意をすることにした。

この世界ではハンターは朝食をとることが少ない。手に持つてきているのが携帯食料であることが原因であると思った。幸いここは密林ということもあり、エリアを変えればキノコくらいは生えているだろうと一応念のため思い愛剣エンドブレーカーを背負った。最初は鎧もと思ったが、着る時の音で仲間が起きるかも知れないと思い、そのまま行くことにした。

昨日密林に着いたときに思つたよりも朝の空気は美味しかつた。一応背伸びと屈伸をして準備運動をしてからキノコ探しにあるいは、モスを発見した。モスとはもといた世界的に言うと食用の肉にも使われている豚のよつたな存在であり、背中にキノコなどが生えているモンスターである。モスの好物は特産キノコのため、モスがいるところを探せばキノコが発見できる。と、ゲームの中で誰かが教えてくれたことを思い出し、そつと近づきモスがキノコを食べているのが見えた。リアルで見るモスはどこか愛嬌があつたが、これからハンターになると決めた自分に言い聞かせモスをエンドブレーカーの斬り下ろしで一撃で仕留めた。倒したモスに剥ぎ取りナイフを入れ丁寧に肉と骨を解体し、近くにあつた特産キノコを探りキンプへ戻つた。

仲間が寝ているのを横目に火を起こし、持つてきていた鍋を加熱し新鮮な肉と特産キノコを炒めることにした。肉がいい頃合に焼けてきたときに調味料代わりに海水を一振りかけると香ばしい匂いが出てきて、米があればなあ等と考えてしまつた。

匂いと音につられたのか3人が目を覚ましたので、用意した朝食を見せるとすこく喜んで食べてくれた。

「ベースキャンプで朝飯が食えるなんて思ってなかつたぜ！
肉とキノコ持つてきてたんだな！？」

と肉を頬張りながら聞いてくるマー・ティーに笑顔だけを返して「まあね。」とだけ答えると、ギルスがこっちを見て
「やつたな。
」
と短く笑ってくれた。

食事を終えると

「さあ準備だ！」

とこづリーダー・マー・ティンの掛け声で全員が各自の武器と防具を身につけた。

「もう怖くない

小さな声でつぶやき自分を激励し本当のハンターへの道を一步進み始めた。

鉱石とワシントンポス（2）（前書き）

しばらくぶりの更新になります。

文章は少ないですが、時間を作つてまた投稿しますので応援お願いします m(—_—)m

鉱石とワシントンポス(2)

朝食を終え各自防具を着込み武器の手入れを行う。自分の命を守る物だから、必ずチェックをしておくように言われたため皆に習い自分の装備のチェックを行う。マーティ達の防具は先日狩ったイランクックの防具であり、怪鳥の赤い鱗を加工した物で鱗や甲殻を紐のようなものでつなぎ止めている。武器は粗末な鉄製の物であり切ると言つよりは『叩く』物にも見える。夜の間にヒューリーの片手剣を見せてもらつたが、頑張れば切れると言つた物だった。彼らが言うには上位のモンスターの素材から作る武器は切れ味が凄く良い物もあるらしい。片手剣は切れ味が重要であり、いつかは自分も剛種武器と言われる最高の切れ味を持つた武器が欲しいと語っていた。私が持つてているのは『エンドブレーカー』と呼ばれる大剣であり、飛竜種と戦うのが好きだった私は好んでこの大剣を使つていたがまさか实物持てるとは思つてもいなかつた。

その大剣の刀身は黄色く、光を浴びると輝きを増し己の持つ龍属性とその切れ味を強調していた。防具にしても胴体、腕、腰、足はリアルキットの純白であり、ゲーム通りだとランナー、龍風圧無効、高級耳栓が常用スキルとして備わっているはずで、頭の赤い髪留めは最近気づいたがどうやらS.P.防具のエスピナキャップであることが分かつた。おそらくいま発動しているのは攻撃力大、見切り3、火事場2、業物1、ランナー、高級耳栓、龍風圧無効だらうと思うが、はたして珠という概念があるのかも疑問であった。マーティ達の防具にそれらしい物は見あたらず、会話の中にも出でていなかった。

そんなことを考えているうちに準備も終わり、出発をすることになった。

マーティの気合いのかけ声に応じエリアを移動する。途中蟹の怪

物ヤオザミを横目で見ながら「美味しいのかなあ」などと考えながら、今度時間があつたら捕まえてボイルにしてみよう等と考えたりした。自分で思っていたより早くこの世界に順応している自分に驚きながらみんなの後を追うと気づいたのだが、ランナースキルがあるのかは分からなかつたが自分が他の人よりスタミナがあり事が分かつた。

更に移動をし今回の目的である洞窟内部へ入ると…そこは断崖絶壁だった。

「まさかこれを降りるの?」

と聞くと普通にそうだよと誰かが言つ。

いやいや、ちょっとまって5mはあるよね?掴むところもないみたいだし…。恐る恐る下をみていると身軽なマーティとヒューイがお先につと言いながら下に降りていった。一人ともショックを膝でよく吸収し無事着地したようだが、正直高いところが苦手な私はそれを惚けながら見つめていると

「いいから早く降りろ!」とギルスに

『背中から押された!』

5mの高さから落下しながら、やつぱつこの世界が夢であればいいのにの願わずに射られなかつた…。

鉱石とケンポス（3）（前書き）

またまたお待たせしました。
お正月休みにまた書きます。

鉱石とランポス（3）

私は今落ちていた。

5mはあらうかと思われる崖の上からギルスに突き落とされたのだ。通常10mの高さから落^トした場合体の一番重い部分である頭がしたになると言っているから5mなら逆を今まで落^トすることはないとばかりけど、今の私の体重が50kg弱だとして武器と鎧で軽く見積もつて150kgの合計200kgが高さ5mから自由落下して9.8Nを掛けるから9.8t^{on}…約10tonの衝撃がかかる計算になる。時間にすればあつところ間のはずなのになぜか冷静に計算をしてしまつ。

地面が近づいてきたなあ、やつぱりコレ夢だよね？

とか考へていると

ズガツ！

と地面をえぐる音と共に着地した。

まるで何度もそれをやつて居るかのように、自然にショックを膝で吸収していた。

あまりの突然の出来事で惚けて居ると後から降りてきたギルスに背中を叩かれ

「いくぞ」

と短く激励され、自分で理解できないままついていった。

最初は洞窟かとも思つたが所々空が見えており明るさには十分に思えた。

その後もう一度（今度は10m以上はありそくな）崖を飛び降り。

。と晒つより突き落とされ、目的であった鉱石の発掘場所に着いた。鉱石の発掘現場なんて自分の田で見たことはなかつたが、目の前に広がる採掘場は神秘的だつた。崖に無数の鉱石柱とでも言つのだろうか、それが突き出ていた。色とりどりであまりの色合いで驚いていると先に衝いていたマーティたちがピッケルを持ちその柱から鉱石を発掘していた。

ギルスも自分の背嚢からピッケルを取り出したので、私も見よう見まねで採掘を始めた。

30分も採掘すると背嚢の中は鉄鉱石やマカライト鉱石などで一杯になつた。

「ところでランポスはいないの？」

と訪ねるとマーティが思い出したように

「いつもはここに結構いるんだけどなあ？」

と言いながら仲間を見ると皆怪訝な顔をしている。

「そういえば上位のハンターから聞いたことがあるんだけど、ランポスやファンゴとかが居なくなつてるとさば氣をつけろって言われたことがある。」

とヒューイが言葉を放つた。それはとても重々しく口から言葉がやつと出たという感じであり、先ほどまでの嬉しそうな表情は一変していった。

言葉を振り絞るような声で

「逃げよう

飛龍がくる……」

と言つた。

囊をまとめ、慌ただしく期間の準備を始めようとしたとき

にか大きな羽ばたきの音が聞こえてきた。

その何かは欧洲の神話で語り継がれて居るものであり、全長6m、体調3m程の存在は万物最強と謡われた伝説であった。そう自分がやっていたモンスターハンターの中で最初に戦った飛龍であったが、その存在感は決してモニター越しには伝わってくるはずのない物であつた。

「陸の女王リオレイア！」

悲鳴のようなヒューリイの声と共にパーティーが逃げる」とを諦め武器を手に取る

「リオレイアが居るなんて聞いてねえぞ！」

叫ぶマーティに

「マスターも知らなかつたんだろ？」「

とギルスはハンマーを構える。

そして陸の女王が大地におり
こちらに威嚇の砲攻をし、仲間が耳をふさいでいる中私は愛剣エン
ドブレー・カーキ構え正直に
美しい
と思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4199v/>

モンハンの世界？

2011年12月25日12時53分発行